

趣旨説明

奥村 弘 (神戸大学大学院人文学研究科教授)

それでは少し私のレジメを見て頂きながら話を聞いて頂けたらと思います。この交換会の課題ということで、今回少し考えていることはいくつがあるんですけども、その中でやはり大きいことは東日本大震災から3年が経ちまして、やはり記憶の継承という問題が色んなところで述べられるようになってきているのではないかなということを強く思うようになってきました。むしろこれは被災地の図書館の方々の方が日常的によくご存知のことであるかと思いますが、震災遺構をどうするのか、ということがいわば関西のマスコミの報道やテレビなんかでもそのことをどうするのか、色々な形で残すべきであるという話と、いや、残して欲しくないという話が交錯するわけですが、それも含めてそういう問題がいわば記憶をどのような形で残していくのか、ということが非常に大きな課題として問われ始めているような状況になってきているのではないかなという風に考えているところでございます。伴って、と言いますか、それと関わりながら大規模な様々な形での記憶をどのように残していくのか、ということで資料の保存活動ということが震災資料に関して、一番恐らく東日本の現場では大きな課題になってきているんだなあという風にこの間、私たちも何度か現地を訪れて思っているところでございます。阪神・淡路の時もそうでしたけども、3年ぐらい経ってきますともう「風化」というような議論が出てきて、一体どうするのかというのが、じゃあ、どうしたら風化させないのかということが問題の話になるのですけれども、その辺のところも少し今日は意見交換が出来ればいいなあという風に思っているところです。記憶の継承というようなことを考えますと、実は結構話は大きくなるんじゃないかなということなんですね。記憶をつなげていくということはこれはいわば文化の一

番根幹的な問題で、私たちは記憶を継承しながら次の世代に送っていかねば、そもそも社会の存立そのものが成しえないということになりますから、私たちの文化の領域の様々な機関、団体というものはそういうものの一番基本部分を担っているところでありまして、これは大学もそうですけれども、図書館、文書館、そういうものも含めてそういう役割というのは極めて基本的に大きいわけですが、その大きな役割がじゃあどうやったら具体的により一層豊かになっていくかということが問われるようなことが恐らくこれは被災地で起こっているだけじゃなくて、そのことはやはり日本全体のこういう問題に関わる人たちにとって、色々な考え方や新しい発想を突きつけられるような段階に今、なっているような感じが私自身はいたしているところでございます。一応ここに「分限を超えて」という風に書いていますが、それまでそれぞれの大学や図書館、博物館、文書館のことが機能そのものを超えて考えなければならぬ状態が発生して、単なるそれぞれの分野の団体の連携という内容だけではなくて、そもそもどういう、そもそももっと大きな私たちが記憶を継承していくためにどんなものが日本社会に必要なのか、どういう形であるべきなのか、ということ自体も実はラディカルに問われているのではないかなという風に考えているところでございます。特に、今回の一連の過程の中で、この記憶の継承の中核的なハブに国立国会図書館が実質上なろうとしている、というかなっているというか、謎の。僕としては中核に座って欲しいなと思っていますが、中核になるような形になっているかどうかはこのところは議論の余地があるような気もいたしますけども、様々な形で図書館がある意味ではこの事業の中では重要な位置を占めてきていることは間違いないことだと思います。災害後の多様な

社会そのものの記憶を残していく活動をやっぱり被災地を見ていまして、それを総合的に行ってらっしゃる方々や、これはやはり各県立図書館であったり、大学附属図書館であったりというところがやはり主体的に動いているわけでした、このことは私たちの日本社会の文化の中でやはり図書館とは何なのか、ということをもう一遍突きつけられているように私自身は考えています。ですから、そういうことも含めてこの記憶の継承の問題を考えていく必要があるかな、という風に思います。

一方、それでは神戸で震災の記憶の継承の問題が今、どうなっているのかということで、一番端的な形で出て来る問題としては、災害、震災の遺構の保存問題ですが、今、神戸でどうなっているかということで、先日、神戸市が阪神・淡路大震災企画展というのをやられまして、この責任者だった杉本さんという元々は区画整理事業とかを震災後やった市の職員の方で、現地で調査するのは非常にお得意のようで、いくつかのところをその企画展の時に見て来られました。今日は少しそれを見ながら考えたいんですが、いくつか出されている神戸市内に残っているモニュメントの例なんですが、杉本さん曰くですが、必ずしももうそろそろ石碑に書いてある字が読みにくくなっていると。そもそも何かということが分からないことを含めて汚くなって読めませんよということになりつつあるということを言われるようになっていきます。例えば、一番上のものは剥げかけている。ちゃんとそれがきちんと内容を含めてこんなことがということを書いてある分もありますけども、段々それも現実にはこういう風に古びてきている。且つこの時も言っていましたけども、場合によってはきれいに取ってあるんだけど、実はいつも前にゴミが置いてある、ゴミ捨て場になっているところもあるんだという話もされてきたけれども、そういう風に必ずしも現実に充分こういう震災遺構というもの機能がしているかが分からないような状態になっているそうなんです。にもかかわらずやっぱり特にこれは大事

だと思うんですが、こういう形で焼け残った電灯であるとか、クスノキの一部が火災で焼けたとこれは神戸市長田区御蔵地区のものですけれども、そういう形で残っているものもいくつか当然あるんですが、非常にこういう例は少ない、ほとんどない。神戸市内を歩いてみてもほとんどない。あるものも住民の方が非常に努力をして、これ自身を伝えていくということをしていないものに関してはさっきのもののように古びているということ展示会の中で率直に展示をされていました。いくつかちゃんとやられている例もあります。これは、神戸市中央区の湊小学校の中の手洗い場なんですけど、そもそも傾いているんですね。なんで傾いたかということ震災で傾いたと。その傾いた手洗い場をそのまま残して今も使っているわけなんですけど、いかに災害の規模が大きかったのかということ子どもたちが手を洗えば思いたすというようなところでやっている部分もあるにはあるけどという話をされていたところなんです。ですからこういうのは事例としては出せますけども、実はほとんど事例として出せるか出せないか程度しかないというような状態になっているわけですね。だから、これが震災19年の現状で、阪神・大震災の展示を震災15年の時に伊丹市立博物館で開かせて頂いたことがあるんですが、その時の状況で言いますと極めてほとんど市内には震災の時のあれだけあったガレキがどこへ行ってしまったんだと思うんですけども、そういうものもほとんど残っておらずに、ここの人と防災未来センターに残っていたいくつかの実物をお借りしてやっと展示が出来たというような状態になっているぐらいに消えて無くなってしまっているというのが20年間の実情です。むしろ、特に今年19年目だったんですが、これは水本先生がどう思われているのか聞いてみたかったんですが、ちょっと19年目にしてはえらい盛り上がった感じが私自身は阪神・淡路大震災についてはちょっと逆に持ちました。これはやはり東日本大震災のインパクトが強いんじゃないかな。東日本大震災のインパクトをもう一度受けて、自分たちが経験したことを再度

もう一度考えてみたいという動きがいくつかあって、今日も後ろで座っておられる専門員の高森さんたちがもう一度記録を作る作業を復活するというのも私も新聞なんかで少し見たりしているんですけども、19年目の中でもう一度東日本大震災があって、その中で違った災害としての阪神をどう位置付けるかということが、いわば記憶の継承というところでは大きくなってきているかと思えます。特に、阪神はもう20年経ちますので、もう大学生も含めてほとんど若い人はまったく災害の記憶がないという状況になっております。神戸大学の震災文庫でも記憶のないに近い方々が中心になって新しいところをどう開くかということが恐らく課題になっているのではないかという風に思っておりますけども、全体としてはそういうことで、今度の東日本大震災の中で、もう一度記憶の継承の問題が全国的に問われる中で、実は阪神の問題ももう一度違った形で私たちは問われるようになってきている。

私自身の関係で言いますと、実は阪神・淡路大震災の時に考えたことと未解決の課題というものがあります。何かと言いますと、資料の一番下のところに書いてあるんですが、実は災害の問題を考えてまして、今一番ぶつかる問題は一番下のところに「大きな地震は、もうけーへん」という感覚と書いてありますが、色んな市民の方に神戸市で聞いていても「大きな地震は、もうけーへん」という人、これは関西弁なんですけど「もう来ないんだ」とみんな考えているところがありまして、もしくは「来たらもう仕方ない」とこれは非常に難しいニュアンスですけども、「もう来たらしょうがない」と考えるかもしくは「もう私ら生きる間はけーへんで」という意見はものすごく聞きます。問題はそういう感覚そのものがある中では、実は減災の取り組みはほんだけ頑張っても恐らく進まないだろうと危機感を持っています。どれだけ「みんなが何十万人死ぬんだ」だとかいう話を新聞が報道してもそれを受け止める市民の方々の中でそういう方が出て来ると、実は昨年4月13日に震度6弱の地震が起きまして、淡路島ではこ

れは僕はもっと揺れたら阪神と同じ規模になるかな、と思う位寝ていて、ほとんど同じ時間なんで思いましたけれども、それがあったんですが、それがまた12月に聞いてもそんなんだ、というのがこの阪神間といいますか、兵庫県の特徴かな。これと一体いかに闘うのか、こういう形での問題というのをどういう風に本当は明日来てもおかしくない、という問題の中で考えるようにみんなが思うようになるかということは実はこの記憶の継承の問題と大きく関わっているような気がします。阪神・淡路大震災の時に未解決の課題として、実は私自身は歴史研究をやっておりますので、被災した歴史資料の保存活動をして参りました。その成果についてはご存知のように東大出版の方から2月に本を出版したところですので、また、見て頂ければと思いますけれども、その被災した歴史資料の保存と震災資料の保存は両輪だとずっと言ってきました。これは何故かというところにも書いてますけども、過去から未来に渡って私たちの記録・記憶が維持されていくためには、実は震災以前の過去の記憶のところをどこまで大事に出来るかが非常に大事になります。何故かと言いますと、地震が発生すると、実はこの歴史的な流れが一旦断ち切られることになります。これは復興から災害が起こってから、その起こった段階から復興から開始していくという形で物事を考える。避難所から始まって、最終的にはまちが元通りになる過程、元通りになると言うけれど元通りの前は何だろうということは余り関係なく元通りという言葉が使われて、地震が発生したところからしか、現在から未来のところしか線がなくなっちゃうという問題があります。それからもう一つは、物理的な問題として過去から現在へというところの一番の基礎を伝えるような歴史資料が失われるということが存在しまして、これがなければ伝えようもないことがあります。問題はこれにとどまらず、この歴史や文化に関わる部分はここに書いておりませんが、災害の発生以降の分野が他の分野に食われて小さくなるということによって、実際より伝えにくくなるということも物

理的にはあります。さらに、3つ目としては、資料の隠ぺいという問題がありまして、地震が発生したということの中でその時に都合が悪いものはいついでになくなるというようなことが当然起こっていました。もしくはそれだけじゃなくて、震災資料に関してやはり阪神・淡路大震災の時の例えば、本部の議事録がないとかという問題や東日本も議事録がないという話が伝わっておりますけれども、あれはないのではなくて、取り方の問題だという風に僕なんかは思っています。最近、うちの教授会でもそうですけども、教授会で決めずに重要な事柄が教授会懇談会で決めるという風習がありまして、決定事項だけが教授会で決まる。実は本当は違うところで喧々諤々議論もしてはるんですが、その部分は活字に残らないというようなことがありまして、一番混乱の時期に関しては本当はそういうものをちゃんと受け継がないとリアリティーに欠くわけですが、そういうものの受け入れがより混乱していることが責任との関係が起り得ますからそれによって変な形で隠ぺいされてしまうという問題が起こってくる。というようなことも含めてやはり地震大きなが発生すると、より過去から未来へという形で私たちが伝えていくものが伝わりにくいという現象が一方で起こってくるということがやっぱりある。逆に、そうだからこそしっかり伝えていく努力がなされれば、思わぬものが逆に思わぬ力で以って社会の記憶が次の世代へ伝えられていく可能性もある時期だと思います。そういうことがある。ですから、やはり過去から未来まで伝えていく必要があって、一つだけ事例を取っていいんですが、最近よくこの事例を言っているんですが、神戸市東灘区の住吉というところで私たちは住吉地区の住民のみなさんと一緒に震災の聞き取りをやったり、震災の記録を作ろうか、作らないかすったもんだしたりしてはるんですけども、その中で、聞き取りをしたことがあります。これは避難所の運営に携わった方の聞き取りですけども、その聞き取りの中で一番面白かったのは、避難所において空襲の経験が大きかったと言うんですね。僕は空襲だから火の問題

だとか、そういうことを言われているのかなと思ったんですがそうではなくて、避難所はちょうど「ほたるの墓」の場所なんですけど、その時の避難所は子ども心に非常にトイレが汚くて大変だったということが一番に思ったと。だから、トイレをどうしたらいいのかということも阪神の時にまず考えた。考えたら実は住吉というところは村でしたので、村の真ん中に水路が走っていて住吉川から水が取れるということなので、近世以来使っていなかった水路をもう一遍開いて小学校の横まで水を流し込んでそれを雑水で使ったという話をされました。食事はどうしたかという、この地域はだんじりが盛んで、みんなで食事を作るのはお手のものだという話をされてはいましたけども、そういう様々ないわば一つは近世からの水の記憶の問題である。そして、それから空襲の経験の問題である、という風に過去からの文化の蓄積そのものが実は阪神の時も地域の中で役に立って、それが避難所や復興を支えた大きな力になったんだということが聞き取りをしていて分かったんですけども、そういうようなもの、つまり過去から未来へどうやって聞き取っていくかということをする大きな役割を担うセッションとして、機関としての図書館のあり方というものをもう一度私は問われているんじゃないかという風に考えているところでもあります。そういうことで、地域の総合的な記憶を地域の中で残していくために、どうしていったらいいのかということがありまして全体としてはやはり僕はその点では総合的な記憶を預かる場所としての図書館の基本的な機能の中でちゃんと全体の過去から未来への地域の記憶の中にこの大震災をちゃんと位置づけていくということがやはり問われているのではないかなあという風に思っています。人と防災未来センター資料室との活動の中でも資料室そのものが専門的な資料館的な機能であると共に他の様々な神戸市内、兵庫県内の博物館、図書館、文書館と協力しながら全体として総合的な記憶の中にこれを位置づけていくということで、今日も入っているパンフレットがそういう観点から作られているパンフレットが中に

一つ人と防災未来センターが作っているものが入っておりますけども、参照して頂ければという風に思っているところがございます。そういう点で、東日本の中でもじゃあ保存・活用をどうするのか、その活用のための研究があるんだと思うんですけど、それはどうするのか。国会図書館の中で本当は何らかの基礎的研究がなされないとなかなかトータルの役割を果たせないんじゃないかなという風に言っていて、ぜひ研究部を作るだけの予算を貰ってくださいと言っているんですが、「なかなか難しい」と言うてはりましたけども、そういうようなことがら、それから、長岡市の田中さんが進めている市民的な活用のあり方を含めた構想であるとか、そういうことがなかなか分野といいますか、今までの発想を超えて私たちは議論すべきところがありますし、それから大学はその中でどんな役割を果たすのか、大学図書館は一体どういう機能をするのかということもこれは先ほども研究の話をしたんですけども研究も含めて展開していく必要があるという事態になっているかと思っています。そういう形で大震災を通して文化の新たな形がここで生みだされていって、それが日本社会のより災害に強く、そして豊かな文化を持つようなものになっていけるかどうかというところで、実は被災地の図書館の方々が果たしている役割というのは大きいですし、それからそれを受け止める私たちも重要な役割を果たさないとアカンのじゃないかなと考えているところでありまして、そういうことが災害ということを通してより深まるようなものが一つでも作っていったらいいなという風に考えてこの情報交換会を開催しているということでございます。以上、終わらせて頂きます。